

## Y2-13

当病棟における急変時シミュレーションの効果

前橋赤十字病院 看護部

○山崎 純子、高橋 美紀、清塚 遊、清水 明美

【はじめに】当院では、病棟毎に年3回の急変時シミュレーション（以下シミュレーションとする）の実施が義務付けられている。しかし、病院内では統一されていないのが現状である。当病棟では、以前新規採用者を対象にシミュレーションを実施していた。しかし、心臓血管内科・外科を含む混合病棟であり、急変も多いことから、対象をスタッフ全員に広げるべきではないかと考えた。

【方法】日本のガイドラインともいえる「救急蘇生法の指針2005<医療従事者用>」に基づいたチェックリストの作成、それに沿ったシミュレーションを実施した。経験年数の異なる看護師4名、医師1名の計5名で行った。1回2チーム、年4回行い、全員が年に1度参加するようにした。

【結果】シミュレーションに参加することで病棟スタッフが急変時の対応を習得でき、チェックリストの改定後も支障なくシミュレーションを行えた。実際の臨床での急変時のスタッフの対応は、2007年では、発見からCPR開始・救急システム稼働まで5～6分、ALS開始まで13分の時間を要していたが、2009年では、それぞれ2分以内、5分と短縮した。

【考察】年に1度スタッフ全員がシミュレーションに参加することは、急変時の対応についての意識付けにつながり、救命処置に対する知識の統一化が図れたと考える。スタッフが得た知識や技術は、実際の臨床での急変時に慌てることなく、1人1人が声をかけ合い、医師を中心とした役割分担・落ち着いた対応といったチーム医療へとつながっている。実際の急変時の所要時間短縮も明らかとなり、シミュレーションは非常に効果的と考える。今後の課題として、より特殊性を考慮したシナリオでの実施、また心肺停止に至らせないような気付け力を向上していけるような取り組みを検討していく。

## Y2-15

フライトナース看護実践振り返りの必要性―群馬県ドクターヘリ開始1年経過―

前橋赤十字病院 高度救命救急センター

○小池 伸享、高寺 由美子、城田 智之、滝沢 悟、大館 由美子、矢嶋 美恵子、中野 実、高橋 栄治、中村 光伸、宮崎 大、町田 浩志

【はじめに】群馬県ドクターヘリは平成22年2月18日に運航一年を迎えた。平成21年度の出勤実績は総要請件数376件であった。フライトナースは運航開始より3名の看護師により当番制をとりフライトにあたっていたが昨年10月より1名の候補者を選出し、机上シミュレーション、オンザジョブトレーニングを経て本年1月より4名にてフライトに携わっている。運航開始からのフライト件数は3名が100件以上を経験した。全出勤に際し、患者記録を発生させ、看護記録を行っている。それを元に定期的な症例カンファレンスを開き4名のフライトナースにて情報の共有化をおこなっている。現場出勤はフライトナース1人での活動であり、そのときの判断や対応が妥当であったのかを第三者の目で振り返るという目的がある。ナースは自分が携わった症例を振り返りながら患者記録を用いて、そこで医師と共に何をアセスメントしたか、なぜその医療行為をおこなったのか、なぜ実施しなかったのか、急変時の対応は適切であったのか、現場での滞在時間、現場での他職種とのコミュニケーション、マネージメントなど報告する。ここで改善を図る必要性のある症例、困難であった症例に対しては医師とカンファレンスを行い問題の解決に至っている現状である。これまで全症例に対し、事後の検証となるカンファレンスは行っているが、1人1人のスキルアップにつながっているのかは不明である。このことから、出勤時のフライトナースの看護実践を評価するにはもう1人ナースが同乗を行い、客観的に看護実践を行っているフライトナースを評価することでスキルアップにつながっていくのではないかと考える。

## Y2-14

医師と共に行う模擬病院を活用しての急変時対応（第2報）

神戸赤十字病院 看護部

○赤松 麻美、須川 京子

【はじめに】平成20年模擬病院を活用し、循環器病棟に必要な看護技術研修と急変時対応の訓練プログラムを作成し、臨床で活用できる評価方法と指導者の育成を課題として発表した。その後模擬病院を有する企業と協働し、急変時対応が実践できる能力向上を旨とした。模擬病院におけるプログラム作成及び研修企画と運営を行った結果、医療チームで行う急変時対応研修に高い評価を得て、今後の教育システムの課題が明確になったので報告する。

【方法】企画はA病棟循環器医師・看護師と企業の社員が行い、1、研修テキストを作成2、受講者による実践と評価で、テキストの有効性の検証3、テキスト内容の修正・検討の3つの過程でテキスト完成を目指した。研修内容は救命措置法の基本技術をBLS・気道管理・除細動のタスクレーニングの後、循環器病棟で発生しやすい急変事例を基に作成した。受講生を初級・中級・上級と能力別に目標を設定し訓練を行った。

【結果】レベル別に達成目標を設定した結果、急変時における自己の役割を明確にでき研修効果が高かった。そして全員が急変場面における救命措置法を身につけ行動に移すことができた。特に初級看護師は、実践に近い環境下での訓練と評価の成果は大きく、急変時対応の知識・技術が向上した。臨床の急変時場面においても、自ら蘇生に加わりチームの一員としての役割を果たし、対応への自信に繋がった。

【課題】プログラムの成果を高めるためには個人のスキル評価だけでなく、医療チームとして蘇生の質を評価し、研修対象者へフィードバックすることが重要である。また限られた環境の病棟内で、医療チームで行う教育システムの構築とさらに、教育プログラムに取り入れ継続・評価していくことが課題である。

## Y2-16

実践的な対応が出来る救護員を目指した当院の救護看護師研修

武蔵野赤十字病院 救命救急センター

○多治見 允信、神 昭仁、倉橋 公恵、伊藤 智子、斉藤 恭子

【目的】救護員としての赤十字看護師を育成するための研修は、当院では平成11年度から実施している。履修内容である災害看護論2・3・4を担当し、従来行っていた講義中心の内容から災害現場で実践的な活動に役立たせるために、受講者参加型の内容を導入した。アンケート結果から、現場活動のイメージ化を図れる研修企画となったので報告する。

【方法】1:研修時間 4時間 2:回数 年2回 3:参加者 平均30名 4:研修内容

・START法トリアージの実習

・首都直下地震を想定、院内傷病者受け入れエマルゴを使用した机上シミュレーション

複数の班に分け、トリアージエリア、傷病者待機場所の設定、入室の実際を行い、最後に発表を行う。

・このケア指導員による被災者、救援者のケアについて考える。

【結果】救護活動のイメージ化については、平成20年度、21年度ともに9割の受講者が出来ている、もしくは少し出来たと答えている。特に災害時、自分が取るべき行動については、20年度の講習に比べ、出来たと、少し出来たという割合が大きく上昇している。また、今後災害救護に参加したいという受講者の割合が増えた。

【考察】今回、超急性期に焦点をあて講義を行っていった。エマルゴトレーニングシステムや、その中にトリアージの概念を組み入れることで、全体の流れを視覚化でき、活動をするときの問題点を受講者が気づくことができていた。特に、自分の行動をどのように行っていけばよいかのイメージが出来ている。

このような実習を取り入れ、受講者参加型の受講内容を取ることは、受講者の活動への意欲を上げ、実践的な活動を捉えること出来る内容になると考える。